

シンガポール複合民族社会と文化

— 規範とエスニシティの視点から —

村 田 充 八

一 はじめに——規模と文化の多様性

多くの研究者が、規範と文化の関係について、取り組んできた。社会的規範とは、社会学の基本的概念として、研究者の多くが一度は取り組んだものである。なかでも、社会的規範と社会的行為の関係を細かく検討したのが、社会学者のタルコット・パーソンズである¹⁾。

パーソンズは、マックス・ヴェーバーの行為論を発展させ、行為の根底に存在している「主観的に思念された意味」をともなう行為の詳細な分析を行った。その過程で、パーソンズは、人間の行う社会的行為に対する絶大な影響力として、「規範」の存在を提示した。パーソンズによると、「規範」とは、「望ましきものと見做された行為の具体的なコースを言葉で記述したもの (a verbal description of the concrete course of action thus regarded as desirable)」²⁾である。社会において、「そうあるべき」という行為の具体的なコースが言葉で示されていることは、パーソンズが述べているように、「コースに見合った未来の行為に対する命令が結びついている (combined with an injunction to make certain future actions conform to this course)」³⁾ことになる。パーソンズに従えば、規範は、社会的相互作用を行う人間に対し、望ましきと見做される行為を行うように方向づける影響力である。その影響力の働き如何によって、相互作用の型は変化する。また、相互作用の複合的産物が文化とするなら、文化の内容自体も変わってくる。このような規範と文化の関

連性を検討するとき、各地域の多様な文化に底在する規範の特質が明らかになる。

アメリカの著名な社会学者ロバート・ニスベットは、その著『社会学入門』において、「あらゆる人間行動は規範によって規制されている (All human behavior is normatively directed.)」⁴⁾と述べている。さらに、彼は、「人生そのものの始まりから、他者との相互作用は規範によって拘束されており、規範によって喚起され、規範によって維持されている」⁵⁾と述べ、人間の行動が規範によって規制されていることを強調している。ニスベットの視点を取り上げるまでもなく、人間の行動は、基本的に規範の影響から逃れることはできない。ニスベットは、また「規範は文化の非常に重要な核心 (Norms are the vital core of culture.)」⁶⁾と述べ、「社会内での人間行動にみられるもので、人間の生物学的行動の直接の所産でないものはすべて文化である」⁷⁾と指摘している。ニスベットの文化の定義を受け入れるなら、「思念された意味」に従って行われる人間行為の所産は、すべて文化となる。人間の行為は、規範に従った行為であるので、行為の束として認識しうる文化は、社会的な規範と密接に結びついている。

ニスベットは、また、「旅行や読書をする人が例外なくひじょうに驚くのは、世界中の文化の多様性である」⁸⁾と述べている。世界各地の文化の多様性と規範の関連性について問題とすると、文化的な「大きな差異は、実質上、文化的なるもの、つまり規範的なものの差異にある」⁹⁾というニスベットの指摘に注目すべきである。

ニスベットはまた、「あるいくつかの規範のうちのどれが、ある特定の社会秩序に対して支配的な影響力をもっているかという点から (in terms of variable norms and the dominating influence they have on a given social order), 社会組織を分類することは可能」¹⁰⁾と述べている。筆者は、文化的特性のすべてが、規範によって決定されるとは考えていない。とはいえ、社会に存在する規範によって、その文化が、絶大な影響を受けていると考えているのである。

なかでもシンガポールのような複合多民族国家にとっては、「行為の具体的なコース」を提示する重要な規範は、「エスニシティ」の特性と結びついて、国家のあり方に大きな影響を与えている。シンガポールは、エスニック・グループ固有の諸文化の統合より成立している国家である。その国家は、エスニシティの諸問題を克服し、各エスニック・グループをいかに統合させようかと腐心している。

本稿は、規範とエスニシティの視点から、シンガポールのエスニック社会に焦点を当て、その国家の特性と各エスニック・グループの特性を考察することを目的としている。その過程で、シンガポールのエスニック・グループを底辺から支えている規範及びエスニシティに着目し、各グループ成員の社会的行動の特性や社会の倫理を問題とする。さらに、その多様性をはらむ国家が、どのような形で民族的統合を実現しようとしているかについて問題とする。筆者のシンガポール2週間の滞在をもとに、シンガポールのエスニック・グループの特性の序論的考察を行う。

二 エスニックの文化と地位基準としてのエスニシティ

シンガポールの社会を問題にするときには、エスニシティの問題をぬきにして考察することはできないであろう。それは、シンガポールが、多くのエスニック・グループから構成されている複合民族国家であることによる。

ところで、エスニシティの概念は、多様である。*Encyclopedia of Sociology*の‘Ethnicity’の著者であるリチャード・アルバも「その定義はまだ確定していない」¹¹⁾と述べている。本稿では、文化人類学者の綾部恒雄の視点に従い、エスニシティとは、「第二次大戦後の人種、民族、国民、宗派などによばれる人間のカテゴリー間の急速な多様化、流動化、相互交流によって生じた、これらの集団よりは一般に小規模で、かつそのいずれにも属さない出自と文化的アイデンティティを共有する人びとの表出する性格」¹²⁾とする。それは、筆者が、シンガポールのような国家において、民族的部分社会を構成する人々が、特定の人種的・民族的な性格または文化的な性格や社会的地位を共有することを通して示される複合的特性全体を、エスニシティと考えているからである。

このエスニック・グループの諸特性も、その諸グループの成員の行動や、そのグループを包括している集団の性格付けに影響を与えているのである。エスニック・グループには、成員の行動を規制する規範的特性が存在している。人々は、それによって、固有の文化を築き上げているのである。しかし、エスニック集団に存在しているエスニシティのために、各エスニック集団は、またさまざまな問題をかかえているのである。

多くのエスニック・グループを抱える複合民族国家に関して、筆者は、なかでも二つの視点に注目すべきであると考えている。第一は、その国家が多様なエスニック文化をどのように統合しようとしているかの問題である。他の一つは、その国家のなかにある各エスニシティが、エスニックの成員の社会的地位を差別化していくという問題である。これは、優越者としてのエスニック・グループの人々の社会的地位と、マイノリティのエスニック・グループの人々のそれに差が生じているという問題でもある。

現代社会は、シンガポールだけでなく、綾部が述べているように、「世界が狭隘化し、異なる民族集団の成員が交流し混淆することによ

て、共通の文化・行動類型が増加しているようにみえながら、依然として民族集団の境界が維持される」¹³⁾ような社会である。このようなエスニックな境界が問題になりがちな社会において、エスニシティをめぐる論点は、国家的統合と民族問題を理解するために重要な鍵を提供する。シンガポールのような多民族国家にとって、国家の最大の課題は、エスニシティを取り巻く多民族的な社会的環境をいかに調整し統合させていくかである。それは言い換えると、国家が、いかにエスニック・グループを統合する社会的な規範を導入していくかということでもある。その点は、シンガポール同様に、多民族を包含する国家には共通の課題でもある。綾部のいうように、エスニック・グループの統合の問題は、「特にアメリカ、カナダにおける文化的多元主義 cultural pluralism ないしは多文化主義 multiculturalism の台頭」¹⁴⁾と共に発展してきたとされる。その意味で、シンガポールの歴史は、民族的・文化多元性の社会に、社会的な統合的な規範を成立させるための苦闘の歴史であり、アメリカやカナダの苦闘にも匹敵するものであったといえるであろう。

エスニシティの考察に関連した第二の点は、ロバート・ニスベットが「社会的地位」を問題にする過程で指摘していることでもある。それは、エスニシティが、「もっとも支配的な地位基準のひとつ (one of the most dominant criteria of status)」¹⁵⁾となるという事実にある。すなわち、エスニシティが、エスニック・グループの社会的地位を決定する重要な指標となっているという点である。それは、五節において取り扱うように、シンガポールのエスニック・グループについてもいえることである。ニスベットは、社会的地位と民族の関係について、「黒人でなく白人であること、ユダヤ人でなく異教徒であること、バルバロイでなくギリシア人であること——これらは、現在の経験および過去の経験が豊富に示しているように、社会秩序におけるひとつの地位を決定的に左右した」¹⁶⁾と指摘している。ニスベットはまた、「どれほ

どの財産、教育、職業、ないしある領域での権威を達成しても、民族性が人に帰属させる地位を帳消しにすることはない」¹⁷⁾と言い切っている。

ニスベットによれば、エスニシティは、人々の獲得的地位をも帳消しにするほど強力な生得的地位と言い換えることができる。確かに、「有利なエスニシティ (民族性)」が必ずしも「高い地位を保証する」ものではないだろう¹⁸⁾。しかし、「民族性——広義の——は、社会において、階級と対照される、カーストの基盤になりやすい」ものののである¹⁹⁾。エスニシティは、生得的なものとして、人々の地位をかなりの程度決定するものである。規範が、文化を強く決定するように、エスニシティが、成員の社会的地位を決定しているのである。ニスベットは、この民族性と地位の相関について、「ヨーロッパからアメリカに移住した、若干のユダヤ人の学者」²⁰⁾の例をあげ、「彼らはその民族性のために、アメリカの大学で、学会における名声を得ることも、市や国家で高い地位を得ることもできなかった」²¹⁾と述べている。

この第二の点に関連し、エスニシティとカーストの基盤について、ニスベットの視点に従って、若干補足しておこう。ニスベットは、「社会内の地位の成層は、民族的差異を考察するための理論的な背景を提供する」²²⁾と述べて、「民族性が、カーストないし準カーストの基盤 (ethnicity forms the base of caste or quasicaste) をなしていることが多い」²³⁾ことを指摘している。ニスベットによれば、民族性は、社会的成層における地位をかなりの程度決定づける指標であり、成員の集団内における地位を固定化し、カースト形成にまで至らせるほどの影響力を発揮するものである。

このように、エスニック・グループは、第一にその社会的な規範との関係において、その集団固有の文化アイデンティティを形成し、第二にそのエスニシティによって、成員は、特定の社会的地位のなかに押し込められることになるのである。シンガポールのエスニック集団間に

カーストは存在しないが、エスニック・グループの間に、地位の差が見受けられることも事実である。

三 海峡植民地域国家シンガポールの求心性と遠心性

シンガポールのエスニックな文化多元主義と社会的規範の問題について、綾部恒雄の視点から、さらに補足をしておこう。それは、シンガポールの文化多元主義が、国家成立の歴史的な過程と関連していることである。綾部は、文化多元主義の問題は、一般に「英国の植民地から独立し、多民族国家として出発した国における問題として興味深い」²⁴⁾と述べている。周知のとおり、シンガポールは英国の海峡植民地域に発展した国であり、「国家を構成する多種・多様な人種・民族集団のナショナルな統合を実現しようと努力している東南アジア諸国」²⁵⁾の一国として、エスニシティと国家のアイデンティの問題は、不可避的な国家的課題となっている。

綾部は、東南アジアの国家について、歴史的な成立の過程を問題として、国家の「領域的類型」論を展開している。綾部は、その過程で、タイ・ミャンマー・ラオス・カンボジア・ベトナムなど「植民地化以前の諸王国の勢力範囲がほぼ残されているような国々に」²⁶⁾を「王国世襲型」国家と呼び、「植民地化以前に興亡した諸王国——（中略）——の版図とはほとんど無関係に植民地の境界が画定され、それがそのまま現在の国家の領域とされている国々に」²⁷⁾、マレーシア・インドネシア・フィリピン・シンガポールを「植民地域世襲型」国家と呼んでいる。東南アジア諸国のなかで、綾部は、「マレーシアの英国からの独立時にマレーシアの一部として独立した」シンガポールは、「英国の海峡植民地下に造成された華人の多い民族構成を基盤に、1965年にマレーシアから分離独立したものであり、植民地域世襲型の異種と考えることができる」²⁸⁾と指摘している。

この王国世襲型と植民地域世襲型の領域的二

類型論は、いふなればその国家的領域を画定する社会的規範の違いにも関連している。両者の間には、明らかに、社会的規範の差異に基づく文化的差異が存在している。この国家的領域の相違の源泉を、王国の伝統と植民地の伝統の相違に求めるという綾部の視点は、伝統的な王国のもつ規範と、外国の植民地域から発展し、外国に開かれた社会を起源とする国家の社会的規範の相違という視点でとらえることができる。シンガポールは、その植民地域世襲型国家として、そこにはすでに、植民地の経営のために、多くの民族が流入するという多民族的な基盤が存在しているのである。

海峡植民地としての外に開かれた国家シンガポールは、多様な民を受け入れる素地をもった外国に開かれた遠心的な社会である。外に開かれた社会は、内部的には一枚岩的な求心的な社会ではない。さまざまな形態の社会や規範・文化を容易に取り込む社会でもある。それは、多様な多元的な文化を内包させる寛容さをもった社会でもある。

この植民地域に発するシンガポール社会の遠心性と求心力の弱い社会に関連して、ゲオルク・ジンメルが、その著『社会学』の第10章「集団の拡大と個性の発達」のなかで述べていることが参考になる²⁹⁾。綾部のいう王国世襲型国家の特性は、おそらく、ジンメルが述べている「自己の内部においては同質的で緊密に関連している諸要素」³⁰⁾からなる集団に相当するだろう。シンガポールのような植民地域世襲型国家は、本質的に、「個別化が増大し、それによって、反発が侵入」³¹⁾するような集団である。植民地域世襲型の国家は、外国との関係において必然的に「遠心的」³²⁾にならざるをえない国家である。そのような国家は、言い換えると、集団「内部での特殊化と個別化」³³⁾を強力に引き起こす国家である。シンガポールは、外に開かれている国家であるだけに、内部における特殊化・個別化を推進することにもつながった。すなわち、外に開かれたシンガポールは、理論的には、エスニック集団間にみられる「諸要素

の反発 (Repulsion)』³⁴⁾を内包することにもなったのである。

従って、シンガポールの各エスニック・グループは、固有の文化的アイデンティティをもってそれぞれが求心化する可能性を秘めているといえることができる。国家の成立に関しては外国に開かれているにもかかわらず、各エスニック・グループはそれぞれ独自の文化的アイデンティティを形成しようとしているのである。すなわち、国家統合という問題については、華人が圧倒的な優勢に立つことによって統合されているが、本質的には、外に開かれているだけに、必然的に、内部では各集団が対峙しているといえることができるであろう。

シンガポールのエスニック集団内部の具体的な検討が、以下の節の課題となる。

四 シンガポールのエスニック・グループ

シンガポールは、今日、世界経済・交通・通信の中心地になろうと、国全体で取り組んでいる。日本の淡路島程度の領土からは、天然資源をほとんど産出しない。しかし、この国は、知的なソフト面を育成することを通して、国際的な貿易、コミュニケーション、交通網の中継地、世界観光地として、政府主導の工業化政策・観光立国化政策によって、アジア諸国のなかでも抜きん出た経済発展を遂げている。

アメリカの東アジア問題の専門家でもあるエズラ・F・ボーゲルは、シンガポールについて、台湾・韓国・香港とともに、「四匹の小龍のなかでも最も多様な人口をもち、かつ唯一の新しい国民国家である」³⁵⁾と述べている。シンガポール大学で文化人類学を専攻し、後、アメリカ・イギリスにおける豊富な海外体験をもとに、海外からのシンガポールへの渡航者向けに多数の教本を書いて活躍しているジョアン・M・クレイグの『文化ショック——シンガポール——』³⁶⁾を手がかりに、以下、シンガポールのエスニシティの特性を概観してみよう。その焦点は、繰

り返すまでもなく、その国家の多民族性とその統合にある。

1992年の年央人口は、「推定281万8,200人（男子142万3,700人、女子139万4,500人）であり、人口密度は4,397人、10年前の3,827人（82年）に比較して570人増加をみている。また民族別構成は華人218万7,200人（77.6%）、マレー人39万9,400人（14.2%）、インド人19万9,600人（7.1%）、その他3万2,000人（1.1%）となっている」³⁷⁾。1990年国勢調査の段階で、クレイグは、総人口のうち華人77.7%、マレー人14.1%、インド人7.1%、その他のエスニック・グループの人々1.1%と報告しており³⁸⁾、90年代初頭の2年間に限って比較しても、エスニック・グループの各人口の変動はない。

圧倒的多数を占める華人も、それぞれ出身地

表1 シンガポール人口の民族別構成

年	計	華人	マレー人	インド人	その他
1821	4,727	1,159	2,851	132	585
1824	10,683	3,317	6,431	756	179
1830	16,634	6,555	7,640	1,913	526
1836	29,984	13,749	12,538	2,932	765
1840	35,389	17,704	13,200	3,375	1,110
1849	52,891	27,988	17,039	6,284	1,580
1860	81,734	50,043	16,202	12,973	2,516
1871	94,816	54,572	26,141	10,313	3,790
1881	137,722	86,766	33,012	12,086	5,858
1891	181,600	121,908	35,956	16,009	7,727
1901	226,844	164,041	35,988	17,047	9,768
1911	303,321	219,577	41,806	27,755	14,183
1921	418,358	315,151	53,595	32,314	17,298
1931	557,745	418,640	65,014	50,811	23,280
1947	938,144	729,473	113,803	68,967	25,901
1957	1,445,929	1,090,595	197,060	124,084	34,190
1970	2,074,500	1,579,900	311,400	145,100	38,100
1980	2,413,900	1,856,200	351,500	154,600	51,600
1990	3,002,800	2,239,700	406,200	230,000	126,900

注) スリランカ人は当初のうち「その他」として集計されていたが、1970年から「インド人」に含められるようになった。

出所) 可児弘明「民族と言語」、綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいシンガポール（第2版）』弘文堂、1994年、79ページ。

を異にする。ボーゲルは、全人口の8割近くを占める華人について、「例えば1980年では、現地でホッケンと呼ばれる80万の福建人がおり、これはさらに厦門出身と福州出身とにわかれていた。またトゥチュウと称される40万人の潮州人、30万人の広東人、14万人の客家、そして13万人の海南人といった具合であった」³⁹⁾と報告し、華人社会も「それぞれが理解不能な方言をもつ集団にわかれて」⁴⁰⁾いると指摘している。同じく、ボーゲルによれば、「中国人の共通語は北京官話（マンダリン）であったが、これはシンガポールの華人にとっては現世代が習った方言の一つにすぎず、心に深く根づいた人種的意味を欠いたもの」⁴¹⁾なのである。しかも、その華人たちが、シンガポール華人社会の研究の山下晴海の調査によれば、シンガポール川河口を中心にする位置に、各出身地ごとに「すみわけ」⁴²⁾ている。

このように、東南アジアのシンガポールという「宝石のようにちっぽけな国家に住み着いている人々」⁴³⁾は、本来は異なる言語を話し、エスニック・グループが混合して生活しているのである。シンガポールは、明らかに、多言語・多民族を内包する複合言語・複合民族の国家である。シンガポール政府は、そのために、複合性に発する現実の諸問題を乗り越えることを、国家統合のための重要政策としている。

クレイグによると、シンガポールの経済発展とともに、海外からの積極的投資にともない、あらたに海外からの渡航者が急激に増加して来ていることが、シンガポールの多民族性をさらに複雑にしている。クレイグは、シンガポールへの新規流入者が、アメリカン・スクールやジャパニーズ・スクール、フレンチ・スクールなどの子弟の教育の場を整備し、各国「社交クラブ」などを通して、母国のアイデンティティを確認しようとしていることを報告している。シンガポールの繁華街オーチャード・ロード沿いには、外国資本の百貨店やスーパー、レストランなどが数多く見受けられるように、シンガポール人を構成する多民族の周辺に、さらに母国

の文化をそのまま導入しつつある諸民族が増加しているのである。

そのようななかで、シンガポール政府は、各エスニック・グループの平等政策を推進する。シンガポールは、1963年に、マレーシア連邦に加入しているが、ただちにその2年後には、マレーシア連邦から独立している。その理由について、東アジア史の中原道子は、「シンガポールとマレーシア連邦との経済的、政治的な差はあまりにも大きく、ことにマレー人優先政策をとるマレーシア政府と中国人の人口が76%をしめ、各エスニック・グループの平等政策をとるシンガポール政府との対立」⁴⁴⁾があったと述べている。このように、独立当初から、シンガポール政府は、諸民族間の平等政策を展開したのである。

その代表例は、言語政策である。それは、国家統合のために、重要な役割を果たす。政府は、国語をマレー語としながらも、各エスニック・グループの言語を、国語と平等に取り扱ったのである。シンガポール社会の研究の可児弘明も、多民族国家シンガポールの「民族と言語」について端的に「国歌マジユラ・シンガプラはマレー語で歌われるが、英語、華語（中国語の北方標準語。マンダリン）、マレー語、タミル語を公用語として平等に扱っていること、さらに政府の行政事務は英語で処理される」⁴⁵⁾と説明している。シンガポールにおいては、地下鉄などの標識も、多言語で併記されている。何よりも、言語的な平等性は、諸民族間の統合にとって、大きな役割を果たしたに違いない。クレイグによれば、独立当時には、諸民族間には人種的な暴力的葛藤もみられたようである。しかし、今日では、「シンガポール人」としての国家的アイデンティティのもとに、各エスニック・グループは協調的に融合しているとされる⁴⁶⁾。多民族の人々は、相互にエスニシティを認め合いながら、共存している姿が表面的には見受けられる。

五 ナショナル・アイデンティティの形成——言語と生活

シンガポール政府は自ら、国民一人一人が「シンガポーリアン」となるように、複合の民族国家の統合を図ろうとする。可見弘明が指摘しているように、シンガポールでは、「ナショナル・アイデンティティを、近代化の様体としては異常ではあるが、国家という管理体制が上から育成していく」⁴⁷⁾のである。そのナショナル・アイデンティティの形成にとって、最重要課題は、前節でも提示したように、第一に言語的統合であった。それは、可見が指摘しているように、「マレー語、英語、華語、タミル語を平等に公用語とする建前を堅持しながら、実際上では英語を共通語とし、それに各人の母語を組み合わせる二言語政策」⁴⁸⁾を取ることで、推し進められる。

シンガポール政府の首相を長く務めた最高指導者リー・クアンユーは、「二言語教育の重要性と限界」(1979年1月5日)という演説において、「複数の文化を融合させる」ことに対する「問題の核心」が言語政策にあると語っている⁴⁹⁾。リーは、まず、華語で教育を受けた華校出身者と、英語で教育を受けた英校出身者とのあいだに、能力の大きな差が生じていることをあげ、「平均的学生の間には、大学一年のレベルで3.2年から4年分の差がついている」⁵⁰⁾ことを指摘している。リーはこの能力差を理由として、英語教育の重要性を主張する。また、リーは、英語教育を重視しながらも、英語と母語の「二言語教育を続ける」⁵¹⁾ことの必要性を指摘している。リーは、複数言語の習得の必要性を指摘して、「私はいま、多言語社会において何が可能か、前よりずっとはっきりわかってきました。いかにして、一つ、二つ、あるいは三つ以上の言語を習得するか」⁵²⁾にかかっていると述べている。

政府にとっては、政策的には「単一言語教育」が簡単であったことはいまでもない⁵³⁾。しかし、リーは、英語教育のみに限定することの危

険性、すなわち「われわれ自身を過去から切り離してしまう」⁵⁴⁾可能性があることを見抜いていた。従って、シンガポール政府が推進した二言語政策は、英語教育の必要性和、民族的な文化の継承という両側面を重視したことになる。英語教育は、シンガポールを外に開かれた国家として位置づけるために、民族言語教育は、多くのエスニックの人々を抱えた国家の内向きの政策であったといえよう。リーは、「中等教育で英語の比重が高まるにつれて、英語の出版物にある西洋の思想や価値観の影響が強まる」⁵⁵⁾と述べている。世界に対して遠心的な政策を押し進めながらも、シンガポールの独自性を発揮しようとするリーの政策が、ここにある。このように、リーの目指した言語政策は、第一に英語教育の完遂、第二に出身民族の母語の習得に主眼が置かれたのである。

その過程において、リーは、「言語は文化を意味」⁵⁶⁾すると指摘し、国民に民族の母語を習得させる重要性を繰り返して述べている。その理由は、リーの指摘するように、「言語には、話してきた人々が何世代にも渡ってみがきあげ、維持してきた、思想や哲学が含まれている」⁵⁷⁾からである。リーは、「わが国の将来とは、一つの国家を形成したさまざまな種族の人々が、適応と生存に役立つと考えるような将来」⁵⁸⁾であると述べている。リーは、エスニックの人々が、外国に開かれた共通言語としての英語教育を受けながら、民族文化継承のために必要な母語を習得する意義について提起したのである。

リーの言語政策は、シンガポールの国家政策に多大な影響を与えることになる。それは、今日、シンガポールのどこにおいても、英語が通じる基盤を与えることになった。シンガポール研究の田中恭子は、シンガポールの一般家庭で話されている日常言語について、「シンガポール華人のほとんどが、福建語、潮州語、広東語など、中国南方方言を母語とし、家庭ではこれを話し、1980年現在でも「シンガポール人口の約6%が家庭での親子兄弟間の会話に英語を用いている」⁵⁹⁾にすぎない、と報告している。

しかし、ほとんどのシンガポール人は、公的には、英語を用いてコミュニケーションをすることができるのである。

このような英語重視の言語政策は、どのような政策よりも、多民族国家シンガポールのナショナル・アイデンティティ形成に役割を果たしたことは疑い得ない。社会的行為は、言語を媒介にして行われる。英語を習得させるという言語政策は、シンガポールの人々を言語的に結び付けることになったのである。しかも、その政策は、強引と思われるような仕方でも推進される。可見は、この言語政策の強行に関して、政府は社会の基本的な構成要素の言語として、共通語としての英語と、各国民の「祖先の国」⁶⁰⁾の言語である母語の二言語政策を強引に押し進めたことを指摘している。可見は、強引な二言語政策の推進が可能になったのは、「1950年代半ばから、英語教育の小学校へ入学する児童数が中国語教育のそれを凌ぐようになっていた」⁶¹⁾からであると述べている。

さらに、シンガポールのナショナル・アイデンティティの形成に重要な役割を果たした第二の点は、政府の推進した住宅政策にあるといえよう。それは、シンガポール本島を計画的に再開発することを目指した「シンガポール・コンセプト・プラン」に基づき、シンガポール都市再開発局(URA)が主導したものである。その住宅政策の目的は、公的な低料金分譲住宅を大量に供給することである。それは、可見が指摘しているように、「複合社会を強制的な住み替えによって、解体させる」⁶²⁾ことにつながったのである。

次節で問題にするが、シンガポールでは、今日も、チャイナタウン・インド人街・アラブ人街というように「すみわけ」が行われていることも事実である。華人社会においても、山下晴海が報告しているように、第二次大戦終了後において、「シンガポール中心部における人口の80%は、華人によって構成されていた」⁶³⁾のであり、「シンガポール川の南岸地区では、第二次大戦前と同様、三大方言集団の明瞭なすみわ

けがみられた」⁶⁴⁾のである。筆者は、そのような「すみわけ」の状態が、存続するなかで、平均的なシンガポール人に低廉で、快適な公団住宅を提供することによって、ナショナル・アイデンティティが推進されることになったと、考えている。政府が供給する新しい公団住宅に比較的安価で入居できることは、各エスニックの人々にとって、愛着に満ちた住宅を手放す寂しさを越えた朗報であったに違いない。

住宅政策は、都市の再開発にも多大の貢献をする。シンガポール共和国の独立以来の急激な変化は、「瀟洒な高層ビル群がスラム街にとってかわり、高層住宅を中心とした衛星都市が漁村と農村の風景を一変した」⁶⁵⁾とされる。しかも、居住地と市内中心地を結ぶ大量高速輸送のために、島の四すみを循環させるThe Mass Rapid Transit (MRT)を建設し、低料金でシンガポールの本島内のどこにでも移動可能な施策を実現している。

表2及び表3は、The Institute of Policy Studiesが1996年1月に出した*Singapore: The Year in Review 1995* ⁶⁶⁾から転載したものである。表2は、HDBフラットの平均価格と平均月収を比較したものである。著者Lee Tsao Yuanの説明によると、平均月収は増加しているにもかかわらず、1993年・1994年には、HDBなどの購買意欲が減少していると報告している。それは、1988年以来、HDBフラットの価格上昇率が、個人の年間収入の上昇率を越えたことによるとされる。表3に明らかなように、1988年と1994年を比較すると、家族の財産は2倍から3倍に増加している。しかし、平均月収は64%しか伸びていないのである。とはいえ、シンガポール・ドルの円換算レートが96年9月段階で、78~79円程度とするならば、民衆に対して、かなりの購買意欲を促すに足る低廉な価格設定がなされているといえる。

住宅政策との関連において、この交通網の整備も、シンガポールのナショナル・アイデンティティ形成に役立ったと考えている。シンガポールの国土は小さいが、さらに、シンガポール

表2 HDBフラット(公団分譲住宅)の平均売価と平均月収(S\$)

年	4 室 モデルA	5 室 改良タイプ	高 級 アパートメント	平 均 月 収
1981	54,680	62,560	該当なし	741
1982	56,940	70,280	該当なし	859
1983	61,000	75,300	110,700	947
1984	62,600	77,200	113,500	1,048
1985	62,600	77,200	113,500	1,131
1986	62,600	77,200	113,500	1,140
1987	64,948	80,163	116,632	1,176
1988	65,021	80,098	114,216	1,273
1989	71,900	84,704	122,916	1,398
1990	76,147	95,171	138,652	1,528
1991	88,794	114,228	168,849	1,669
1992	103,387	143,400	224,960	1,794
	年 平 均 増 加 率 (%)			
1981-1992	6.0	7.8	8.2*	8.4
1981-1988	2.5	3.6	0.6*	8.0
1988-1992	12.3	15.7	18.5*	9.0

注) 1. 価格は、3タイプのもっとも平均的なデザインのものに基づいている。

2. 1981年から1987年の価格は、ニュータウン及び、郊外住宅地のフラットの価格である。1988年以降は、都心から離れた5つのニュータウン(ブギ・バトク、チョア・チュー・カン、ジュロン・ウエスト、パーシー・リス、タンピニス)で売りに出されたフラットの価格である。

*このデータは、1983年から計算されている。82年及び83年は該当なし。

出所) The Institute of Policy Studies, Singapore: *The Year In Review 1995*, The Academic Press, p. 29.

本島を循環する公共交通システムMRTが整備されて、国内の移動に時間と経費をかける必要はない。ただし、自家用車を所有し使用することは、平均的な庶民には高嶺の花のようである。それは、「国土の狭い小国において特権を有することになる」⁶⁷⁾からである。さらに、MRTのターミナル付近には、ショッピングセンターや教育施設、公園、娯楽施設、緑地など都市基盤が整備されている。前掲クレイグのシンガポール紹介によると、今日、大体「シンガポール人の85%以上が、政府公団住宅Housing Development Board (HDB) のフラット (flat) に住んでいる」⁶⁸⁾のである。彼らは、住宅資金をCentral Provident Funds (CPF) から借りて、フラット(高層アパート)を賃貸または購

表3 財産額指標と平均月収指標

年	住宅*資産 価 格 指 標		平 均 月 収 指 標	
	1990=100	1988=100	S \$	1988=100
1980	46.7	59.2	692	54.4
1981	79.8	101.1	741	58.2
1982	80.5	102.0	859	67.5
1983	90.0	114.1	947	74.4
1984	85.2	108.0	1,048	82.3
1985	71.6	90.7	1,131	88.8
1986	63.9	81.0	1,140	89.6
1987	74.2	94.0	1,176	92.4
1988	78.9	100.0	1,273	100.0
1989	88.5	112.2	1,398	109.8
1990	100.0	126.7	1,528	120.0
1991	110.5	140.1	1,669	131.1
1992	127.6	161.7	1,804	141.7
1993	163.4	207.1	1,918	150.7
1994	234.8	297.6	2,086	163.9

注) *住宅は、一戸建住宅、二件一棟住宅、テラス・ハウス、私有フラット、分譲アパートを含めている。住宅資産価格の指標は、1990年を100としたものである。

出所 The Institute of Policy Studies, Singapore: *The Year In Review 1995*, The Academic Press, p. 30.

入する⁶⁹⁾。シンガポールには、公的資金を借りて、公団住宅を取得するシステムが確立し、「国民の84%が持ち家に住んでいる」⁷⁰⁾のである。

政府公団住宅は、「一人当たりの居住面積は、平均20平方メートルということで、これは4人家族がベッドルーム3室の住宅に居住しているのに相当する広さ」⁷¹⁾とされる。「今後一人当たりの居住面積は35平方メートルに増大し、4人家族ならベッドルーム4室あるいはそれ以上の広さの住宅に生活することが可能となる予定である」⁷²⁾という。一戸100平方メートルあたりの分譲価格は、96年時で、日本円に換算して約1,000万円であるという。この価格を考えると、シンガポール人にとって、平均的な年収の約5倍で住宅取得が十分に可能であり。わが国に比べて、価格がいかに低廉に抑えられているかが明らかである。

これらの生活関連の基本的都市基盤整備は、中間層のシンガポーリアンにとって、生活のレベル・アップにつながるとともに、ナショナル・アイデンティティの形成に役立ったことはいうまでもない。交通や住宅政策は、エスニック・グループの人々に、平等に開かれた政策であったのである。

六 エスニック・グループの居住地と職場の地位

ところで、可児は、その著『シンガポール海峡都市の風景』⁷³⁾において、シンガポールのほらむさまざまな矛盾について、「『近代』の不条理を背負って」という題のもとに述べている。どのような国家にも矛盾・不条理は存在するのかもしれないが、なかでもシンガポールには、「移民社会」であることに発する問題が山積している。

可児は、シンガポールの人口が、「1849年に5万人余であった」⁷⁴⁾と述べている。人口は、「貿易の拡大、植民地型経済の拡大」⁷⁵⁾によって、中国の南部からの移民が大量に流入する。そのことによって、可児が述べているように、「シンガポールという中国系住民を主体とする都市国家がムスリムの大海のまっただなかに存在する」⁷⁶⁾ことになるのである。

そのなかで、イギリスは、シンガポールの植民地経営のために、「シンガポールの河口を中心に都市づくりを始めると、民族別に居住地域を割りふる『住み分け』政策」⁷⁷⁾をとったのである。

可児によれば、「シンガポールでもっとも有力な商人であった福建人は、中心商業地に近い部分に集住し、職人の多かった広東人は、必ずしも商業活動にむいた地区を占める必要がなく、チャイナタウンの南寄りに集中する傾向をみせた」⁷⁸⁾のである。そこには、当然のこととして、可児のいう「複合社会の壁」⁷⁹⁾が成立することになる。可児は、北インドからの出身者と、南インドからの出身者の間にも、同じイン

ド出身でありながら、宗教や経済的な壁が存在していたことを指摘し、「ヒンドゥーのカースト制は、シンガポールやマレーに根づかなかったが、宗教の別と、明確な経済分業とがインド人社会にあった」⁸⁰⁾と述べている。シンガポール社会は、繰り返すまでもないが、多民族性を、またその相互の「反発」を前提としていることには相違ない。

このような移民による複合民族国家に関して、前掲リチャード・D・アルバは、*Encyclopedia of Sociology*において、エスニシティ研究には、移民者の世代Generationの差による同化Assimilationの実態や、移民者の生まれたコーホートBirth cohortの差による移民者の生活史の検討が必要であることを指摘している⁸¹⁾。筆者は、エスニシティ研究には、他に、エスニシティを包括する社会の階層分析を通して、マジョリティ集団と従属的集団の階層的差異を問題とすることが大切であると考えている。そのような階層の分析には、エスニシティにともなう偏見や差別の実証的な検討が必要となろう。

エスニック・グループの人々の雇用形態は、通常、アルバによれば、同一労働であっても、賃金が異なる形で現れてくるという⁸²⁾。それは、ジェフリー・G・ライツが、『カナダ多民族社会の構造』⁸³⁾のなかで、特にその5章「エスニック集団の経済状態」で述べているところでもある。ライツは、カナダ社会に移民したさまざまなエスニック・グループが、どのような職業に就く頻度が高いかを検討して、各エスニック・グループの「仕事の地位と所得の不等性」⁸⁴⁾を明らかにしている。ライツは、エスニック・グループの出身背景の相違によって、獲得する「仕事の地位 (Job Status)」が異なり、「所得や不平等性 (Income Inequality)」があることを述べている。ライツは、また「仕事の機会や社会移動 (Job Opportunity and Mobility)」も異なることを明らかにしている。要するに、ライツは、エスニックの人々の間に、出身の背景の相違によって、矛盾や不平等が生じていることを提起したのである。

シンガポールのエスニシティに関して、筆者は、実証的調査も行っていないが、シンガポールに進出した日本企業の訪問を通して明らかになった知見、すなわちシンガポールのエスニック・グループの「区分けされた労働市場 (Segmented labor markets)」⁸⁹について述べておこう。その企業においても、エスニック・グループの違いによって、企業組織内における仕事の地位の獲得の差が確認できた。従業員の経済的な地位 Economic Position は、エスニック・グループによって異なっていた。

A企業は、1993年に、シンガポールの西北、建設中のコーズウェイ・ポイント（マレーシアとの連絡橋の起点）に近い工場団地に進出し、94年の6月に操業を開始した金属加工メーカーである。A社は、米国とシンガポールに工場進出し、日本においては歴史のある企業グループの中核を担い、大手電機メーカーむけTVフレームを供給している。シンガポール工場の従業員数は、1996年9月現在、5人の日本人スタッフを含み約67名である。

A社において、工場長はじめ主な役職は日本からの出向社員である。管理部門のスタッフは、華人によって占められている。製造ラインの従業員は、ほとんどがマレー系の人々である。作業現場で働く従業員には、華人と見受けられる人はいなかった。

現地人従業員の給与は、基本月給が330～450S\$（シンガポールドル）である。オペレーターが575～780S\$、テクニシャンが1,050～2,200S\$、スーパーバイザーが1,900～3,300S\$、エンジニアが2,500～4,000S\$、日本人ジェネラル・マネージャーが74,000S\$、日本人マネージング・ディレクターが78,000S\$となっている。この企業では、日本人スタッフ・現地人華人・現地人マレー人と、「職場の地位」が明確に異なっている。またその地位の差に基づいて、給与体系も異なるのである。このような、小さな企業でも、職場のエスニックな地位の格差が歴然と存在しているのである。

職場の地位の格差は、シンガポールの至る所

に見受けられた。シンガポールには、スリランカなどから多くの出稼ぎの人々が入り、建築現場などで働いている。清掃の行き届いたシンガポールの美しさは、出稼ぎの人々によって支えられていると聞いた。道路の清掃従事者の多くが、スリランカから出稼ぎに来た人々で、シンガポール人はそのような業務に携わることを嫌うという。清掃業務や建築業務に従事する人々が手にする一日の労賃は、8～10S\$とされる。日本円で、1996年9月現在で700～800円相当でしかない。このような例からも、シンガポールには、エスニック・グループによる仕事の地位の格差と、所得の不平等分配が存在していることを説明することができるであろう。華人が人口の8割近くを占めているということからも、それらの華人がマジョリティとしての地位を得ていることは明らかである。

訪問した日本の旅行会社支店においても、専従スタッフやガイドとして高い職場の地位を得て働いている人々は華人が多かった。ある宗教教団がCommunity Projectの一環として政府の支援を受けて運営している高齢者用福祉施設 (Seniors Activity Centre) も訪問したが、案内の政府職員は、Ministry of Community Developmentの華人のスタッフであった。そのセンターの施設長や医師は華人であった。しかし、実際にセンターを運営している女性のスタッフはインド人であった。華人社会のなかでも、インド人女性が活躍している場合も存在している。

これらの例だけで、エスニック・グループの職場の地位に関して結論的な知見を述べるわけにはいかないであろう。しかし、華人が、シンガポールの職業的地位において、上位を占めていると指摘しても、大きな間違いではなかろう。それは人口数の多さだけの問題ではないであろう。

七 華人社会の宗教文化と伝統の継承

複合民族国家シンガポールは、華人が人口数だけでなく、職場の地位など多方面で大きな勢力をもっている社会である。したがって、シンガポールには、華人社会特有の規範に基づく華人文化が基層に歴然と存在している。本節では、華人文化と深い関わりのある華人の宗教行動をみて、さらに複合民族社会と文化に一つの考察を加えたい。

シンガポールの宗教についての実態報告と分析については、シャーマニズム研究の第一人者佐々木宏幹がシンガポールの「宗教と世界観」⁸⁶⁾を研究した論稿がある。佐々木は、「シンガポールの主要な宗教は、総人口の約8割を占める華人に支えられる“中国（的）宗教”である」⁸⁷⁾と述べている。佐々木は、この「中国（的）宗教」(Chinese Religion)については、一般に「長い間、中国（人）の宗教は儒教、仏教、道教に三区区分する方法によって説明されてきた」⁸⁸⁾が、「シンガポールの“中国（的）宗教”は神教、仏教、祖先崇拜、道教などを包含する統合的な宗教体系であると促えなおすことが可能であろう」⁸⁹⁾と述べている。なかでも「神教」(Shenism)」という宗教範疇は、佐々木によれば、「必要に応じてさまざまな神（Shén）に関わろうとする華人大衆の宗教心、世界観、宗教行動の特殊な範囲を意味する」ものと説明し、それは「中国的なシャーマニズムでタンキー（童乩）信仰」と呼称されると述べている⁹⁰⁾。タンキー信仰に代表されるように、シンガポール華人社会の宗教が、さまざまな宗教の混合物であることには相違ない。

タンキー（童乩, tang-ki or dang-ki）とは、「神仏の靈魂をみずからに憑入させ、その間は神仏自身として振舞うスペシャリスト」⁹¹⁾である。これについては、上海生まれで、トロント大学の宗教学の教授であるジュリア・チンも、シンガポールの民衆の信仰のなかに根強く生きているものと述べている⁹²⁾。タンキーは、若者

の占い師を意味している。チンによれば、タンキーは、必ずしも若者である必要はなく、長生きすることも期待されていないという⁹³⁾。彼（彼女）らは、民衆の求めに応じて、霊に取り憑かれ、トランス状態に陥り、霊媒者としての役割を果たす。彼らは、刀剣をのどにつき当てたりすることを通して、一般の死すべき人間の世界を越えた特別な霊力を与えられた存在として、さまざまな神々の言葉を民衆に伝えるのである⁹⁴⁾。

華人の宗教が、上記「中国（的）宗教」の言葉が示しているように、さまざまな宗教的混合物であることに相違ないが、華人には明確な宗教的自覚はないとされる。ジョアン・M・クレイグは、「あなたの宗教は何ですか」と華人に尋ねても、たいていは「私はフリー・シンカー（Free Thinker）」であると、戸惑いながら答えると述べている⁹⁵⁾。クレイグによれば、「フリー・シンカー」とは、「ごたまぜ（Melange）の信仰や行動」をする人々のことを意味する⁹⁶⁾。

とはいえ、基本的には、華人の宗教は、道教、儒教、仏教並びに先祖崇拜の四種類の宗教が基盤をなしているといえよう。クレイグは、なかでも道教が「長寿や不滅と関連し、精力や若々しさを保つことを目的とした、呪術的・神秘的・オカルト的な信仰体系」であり、これこそが、華人の行動様式の多くの部分の基盤をなしていると指摘している⁹⁷⁾。クレイグはこれらの華人の宗教を以下のように説明している。すなわち、儒教は、華人の行動の倫理的規範・人生の哲学的規範として重要な働きをしており、政治的原理となっていること⁹⁸⁾。仏教は、死者儀礼に関連して、死者の生まれ変わりと先祖崇拜の概念を包括する役割を担っていること⁹⁹⁾。先祖崇拜は、家族の絆を保持する上に最も重要な役割を果たし、死者と生者を結ぶ絆であること¹⁰⁰⁾。華人の子孫にとって、先祖祭祀をすることは、義務となっていることである¹⁰¹⁾。先祖祭祀をしないことは、華人社会のなかに生きるために必要な社会的規範を侵すことにつながるのである。

儒教研究の加地信行は、「再生や長生という現世への執着に満ちていた中国人が、なぜ輪廻転生という異質の仏教を信じたのか」¹⁰⁰⁾という疑問を出発点として、中国人一般の宗教文化の特性を提示している。要するに、儒教と道教を基本とする宗教に、異質の仏教が混交したことに對して、加地は、そこには「民衆の壮大な仏教誤解」¹⁰¹⁾があったことを指摘している。加地は、「輪が回り続けるように苦しみがかく転生」して長く長く続くという点がすっぱりと抜け落ち、死んでも来世に再びく肉体を持って生れることができるなら、良いではないか¹⁰²⁾と中国人が考えたと述べている。中国人一般の宗教の根底について、加地は、「家族の祭祀による現世へのく再生く――招魂再生」の儒教と「自己の努力による不老く長生く――不老長生」の道教と「因果や運命に基づく輪廻く転生く――輪廻転生」の仏教が存在していると指摘している¹⁰³⁾。

これらの、儒教、道教、仏教とならび、なかでも民衆の生活に直結した先祖祭祀は、シンガポール華人社会の家族的結合とも密接な関係にあり、重要な宗教規範となっていると考えることができる。華人は、先祖祭祀を通して自らのルーツを再認識し、ルーツを子孫に伝えていくことを通して、自らのエスニック・アイデンティティを確認していく。筆者は、華人のとりわけ家族の宗教行動の根底には、何よりも先祖祭祀が存在していると考えている。

アメリカのエスニック・ファミリーについて、詳細な研究を行ったチャールズ・H・ミンデル及びロバート・W・ハーベンシュタインは、各エスニック・グループがどの程度自らのアイデンティティを確認し、他のものに依存しないで独り立ちしていくかは、エスニックの成員を自らのエスニックの文化にいかに適合させていくかの実力にかかっていると述べている¹⁰⁴⁾。ミンデルとハーベンシュタインは、また成員をエスニックな文化に適合させる社会化の過程において、「家族」が何よりも重要な役割を果たすと述べている。彼らは、アメリカにエスニックの家族がたどり着いたときの歴史的経験が、

後のエスニックの文化形成に影響を与え、形成された文化のパターンが、後のエスニックの家族の役割や地位を決定していくことを、指摘している¹⁰⁵⁾。

この視点によれば、中国人がシンガポールに移住し、常にルーツの再生を図ってきた文化の型は、先祖祭祀であったと結論できるであろう。先祖祭祀という宗教行動を通して、華人は歴史的経験を想起しつつ、家族のアイデンティティを確認してきたのである。もちろん、南部及び南東部の中国から移住してきたシンガポールの華人の社会をみるときに、彼らの故郷において、非常に重要な位置を示していた親族関係(The lineage system)の絆は、シンガポールにおいては故郷ほど十分に保持されることはなかった、という調査結果もある¹⁰⁶⁾。家族や親族の紐帯は、中国本国ほど強いものではないとしても、華人社会にとって、社会的な規範として先祖祭祀が大きな影響を与えたことは明らかである。

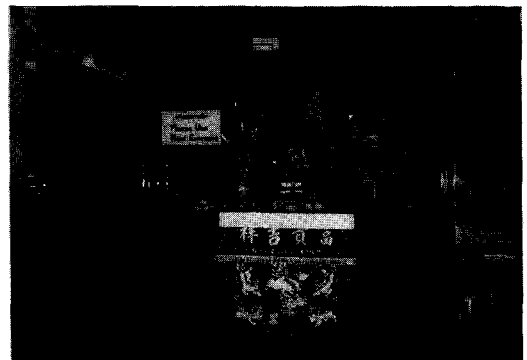


写真1 中元の精霊棚(1)

筆者のシンガポール滞在は、9月で旧暦によれば7月であった。そのために、筆者は、旧暦「7月15日を中心に行われる鬼魂を供養するための大祭」¹⁰⁷⁾が至る所で行われているのを観察した。旧暦7月15日は、道教の地官大帝の生日を記念する中元にあたる。この時期は、仏教の盂蘭盆会の時でもあり、餓鬼に対する供養が行われる。写真1は、シンガポール市街の中心地ラッフルズ・プレイス近くの高層ビルの玄関、写真2は、チャイナタウンの一角に設置された

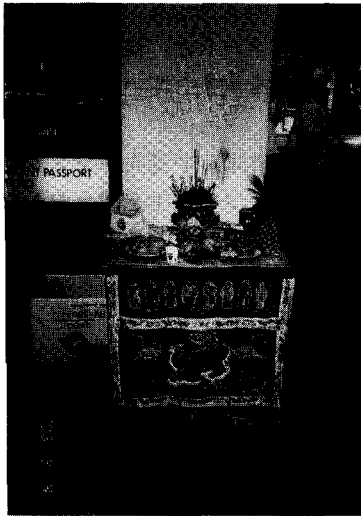


写真2 中元の精霊棚 (2)

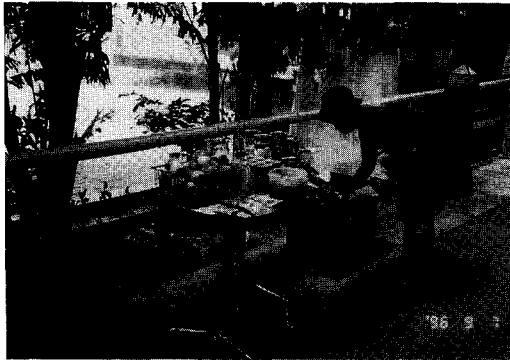


写真3 中元の精霊棚 (3)

施餓鬼のための精霊棚である。花や、果物が供養として供えられている。写真3と写真4は、同じく施餓鬼の行事の写真である。MRTの西端ブーン・レイ駅のファースト・フードの店舗前で、店員が紙銭(Paper money)を燃やしている。テーブル上には、果物や菓子(月餅)が供えられ、焼かれるべき紙銭が置かれている。人々は、この季節、あの世においても必要な食料やお金を供え功德を積むことを心がける。この中元の宗教行事一つをとっても、それは、明らかに道教と仏教の混合宗教行事ではあるが、先祖の人々を供養する意味がこめられているのである。それは、先祖供養は、華人社会においては、必須の宗教行

写真4 中元の精霊棚 (4)
紙銭を燃やしている

動なのである。

マレーシア・ペナン島の中元節を詳細に研究した渡邊欣雄は、華人の意識について、「華人は、祖籍地とは異なる異文化社会に生活しておりながら、意識として祖籍地の伝統を保持しようとし、永く子孫に漢文化を伝えようとしている」¹¹⁰⁾と述べている。大々的に行われる中元の祭儀を通して、多くの漢人が「祖籍」を想起しつつ、伝統文化を在続させて、自らのアイデンティティを確認していくのである。それは、華人シンガポリアンとしても、当然のことなのである。

八 おわりに——複合民族社会を超えて

複合民族国家シンガポールには、華人社会特有の宗教文化があるように、各民族特有の規範と文化が存在している。国民の13~14%を占めるマレー人は、宗教的側面に関連していえば、その99%はイスラム教徒である。彼らは、マレー文化のなかに生きており、シンガポール最大のマイノリティを形成して、シンガポール社会の中流階級を形成しつつある¹¹¹⁾。マレー人の文化は、イスラム教の宗教的特性と切り離して考えることはできないであろう。

インド人は、国民の7~8%を占める。彼らは、インド・パキスタン・バングラディシュ・スリランカなどを祖国とする人々である¹¹²⁾。ク

レイグは、「インド人」という語の範疇は、文化的にも、言語的にも、宗教的にも、地理的にも非常にあいまいであると指摘している。彼らは、保守的・伝統的な人々から、近代のかつ自由な人々と、その範囲は非常に広いのである¹¹³⁾。

インド人の56.5%はヒンドゥー教徒である。シンガポールのイスラム教徒の22%がインド人でもある。言語的には、インド人の63.9%がタミール語を話す¹¹⁴⁾が、1992年の時点で、インド人の子供たちには、タミール語・ヒンドゥー語・ウルドゥー語・パンジャブ語・ベンガル語・インド西部のグジャラート語を第二言語として選択することが許されているという¹¹⁴⁾。インド人の宗教には、他に、プロテスタント・カトリック教徒・プロアスター教徒、ジャイナ教徒・シーク教徒と多様な宗教信者が存在している¹¹⁵⁾。

そこには、エスニシティと宗教的規範が深く関わっている。また、それらの民族性・宗教性と密接に関連した諸文化が息づいていることになる。

シンガポールの多様性は、各エスニック・グループのエスニシティや、そのグループ特有の社会的規範に基づく多様な宗教・言語・文化にとどまるだけではない。その多様性はグループ間の職場の地位の差に代表されるグループ間の諸格差も内包している。シンガポールの中央ビジネス地区にへりつくように、シンガポール川河口の南西にチャイナタウン、北東にアラブ人街、その北にインド人街と、住み分けも存在している。あのボスニア＝ヘルツェゴヴィナにおいては、宗教の「宗派への帰属は民族的な帰属を決定」¹¹⁶⁾し、宗派間の対立が、悲惨な紛争を生起させたのである。しかし、シンガポールにおいては、宗派的な対立は表面的にはみられない。とはいえ、ヒンドゥー寺院・モスク・中国寺院が隣り合って位置しているのを見ることもできる。エスニック社会の宗教的規範に基づく民族的・宗教的混在性を受容しているのが、シンガポール社会でもある。

二節でも検討したように、求心的で同質的なエスニック社会が、外集団としての社会に対し

て閉鎖的であり、遠心的な異質的社会が外集団に対して寛容であるという仮説を受け入れるなら、シンガポール複合民族国家は、国内においてはエスニック・グループ間の異質性を保持しながら、外部の国際社会に対して開かれた寛容な社会であると結論できよう。逆にいえば、国際社会に対して遠心的であることは、理論的には、内部のエスニック・グループが独自の社会的規範とエスニシティを発揮することができることにもつながるのである。

シンガポールは、現実には、華人が大きな勢力を有している社会である。おそらく、今後とも華人社会を中心に、外社会への寛容性を保持する国家として、エスニックの多様な文化と言語を内包しながら、経済的發展を続けていくのであろう。複合民族国家シンガポールは、ナショナル・アイデンティティの形成を目指し、エスニックな多様性を生かしながら、その多様性の「もろさ」も自覚しつつ、その壁を乗り越えていこうとしている。

注

- 1) パーソンズ先生については、関西学院倉田和四生先生との関係から、多くの思い出がある。パーソンズ先生は、倉田先生の私信に答えられて、1978年の秋に関学客員教授として来日された。そのときに、大学院の先輩たちとともに、集中講義を受講した。振り返るに、講義の難解さとともに、母校で大家の講義に出席したという思い出と感慨が込み上げてくる。倉田先生が、パーソンズ先生がエドワード・シルズたちと編集された『社会理論選集』(Edited by Talcott Parsons, Edward Shils, Kaspar D. Naegle, Jesse R. Pitts, *Theories of Society*, The Free Press of Glencoe, 1961)のなかから、社会システム論の概念図式などを編訳されて、『社会システム概論』(晃洋書房、1978年)を出版されたとき、筆者は校正原稿をパーソンズ先生来日の前に読ませていただいた。先生が、パーソンズ先生の講義・講演集を編訳され、『社会システムの構造と変化』(1984年、創文社)を出版されたときに、先生は筆者撮影によるパーソンズ先生の写真を巻頭に用いてくださった。パーソンズ先生のような碩学が、3カ月も滞在され、集中講義までされたのは、パーソンズ先生と倉田先生の深い親交があったからであった。
- 2) 3) Talcott Parsons, *The Structure of Social Action*,

- The Free Press, 1968. p. 75. 稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造 1 総論』木鐸社, 1976年, 121ページ。
- 4) 5) Robert A. Nisbet, *The Social Bond: An Introduction to the Study of Society*, Alfred A. Knopf, 1970, p. 222. 南博訳『現代社会学入門 (三)』講談社学術文庫, 1977年, 9ページ。
- 6) 7) *Ibid.*, p. 223. 同上書, 11ページ。
- 8) *Ibid.*, p. 224. 同上書, 14ページ。
- 9) *Ibid.*, p. 225. 同上書, 14ページ。筆者は、ニスベットの視点によって多くの視点を教えられ、社会的規範と技術社会の諸関係の問題を取り扱ってきた(参考、拙著『技術社会と社会倫理——キリスト教技術社会論序説——』見洋書房, 1996年)。拙著においても、検討しているように、今日の技術社会の根底に、デカルト以来の機械論的な技術的規範が存在していることを提示した。そこでは、それを乗り越えて行くところに、新しい文化的な継続の可能性があるのではないかと指摘した。技術的規範の検討をへて、その規範によって、今日の社会的な動因としての社会倫理が決定され、その倫理的特性によって、この社会に技術的文化が広く行きわたっていることを明らかにした。筆者は、拙著において、近代社会における技術至上主義的な規範的特性による、社会の分析を行っている。
- 10) *Ibid.*, p. 225. 同上書, 15ページ。
- 11) Richard D. Alba, Ethnicity, *Encyclopedia of Sociology*, Vol. 2, Edgar F. Borgatta(ed.), Macmillan Publishing Company, 1992, p. 575.
- 12) 綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂, 1993年, 69ページ。綾部のエスニシティの概念定義にみられるように、エスニシティとは、何よりも人種的・文化的な特性と密接に結びついている。その人種的・文化的特性は、すでに一節において指摘したように、部分社会としてのエスニック・グループの規範的特性と密接に関係している。エスニックな「文化的アイデンティティ」は、その文化の培地に存在する規範と無関係ではありえない。その意味で、綾部の概念定義は、シンガポール社会のエスニックな規範と文化の連続性を明らかにするために、有効な内容を提示している。
- 13), 14) 同上書, 69ページ。
- 15) Nisbet, *op. cit.*, p. 193. ニスベットの, 南博訳『現代社会学入門 (三)』講談社学術文庫, 1977年, 173ページ。
- 16) *Ibid.*, p. 193. 同上書, 173-174ページ。
- 17) ~19) *Ibid.*, p. 193. 同上書, 174ページ, 傍点筆者。
- 20), 21) *Ibid.*, p. 193. 同上書, 175ページ。
- 22) *Ibid.*, p. 214. 同上書, 214ページ。
- 23) *Ibid.*, p. 213. 同上書, 214ページ。
- 24), 25) 綾部, 『現代世界とエスニシティ』, 前掲書, 69ページ。
- 26), 27) 同上書, 73ページ。
- 28) 同上書, 74ページ。
- 29) Georg Simmel, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot/Berlin, 1908. この10章は、彼の *Über soziale Differenzierung, Soziologische und Psychologische Untersuchungen*, Duncker & Humblot, 1908, Kapitel III. から一部とられたものである。
- 30) *Ibid.*, SS. 527-528. ゲオルク・ジンメル, 居安正訳『社会文化論 社会学』<現代社会学大系 I> 青木書店, 1970年, 54ページ。
- 31), 32) *Ibid.*, S. 528. 同上書, 55ページ。
- 33) *Ibid.*, S. 529. 同上書, 55ページ。
- 34) *Ibid.*, S. 528. 同上書, 55ページ。
- 35) エズラ・F・ボーゲル, 渡辺利夫訳『アジアの四小龍——いかにして今日を築いたか——』中公新書, 1993年, 104ページ。
- 36) JoAnn Meriwether Craig, *Culture Shock!: Singapore*, Times Books International, 1993.
- 37) 可見弘明「風土と地理」, 綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいシンガポール【第2版】』弘文堂, 1994年, 58ページ。
- 38) Craig, *op. cit.*, p. 13. 他民族間結婚によって生まれてきた子供たちは、通常父のエスニシティに分類される。その他の人々は、ユーラシア人すなわちシンガポール土着アジア人とヨーロッパ人、の混血児の子孫、及び少数のアメリカ人、アラブ人、ユダヤ人などである。スリランカ人・パキスタン人は、インド人に分類されている。
- 39) ~41) ボーゲル, 前掲書, 105ページ。
- 42) 山下晴海「シンガポールの華人方言集団のすみわけの形成と変容」『シンガポールの華人社会』大明堂, 1988年, 31-116ページ参照。
- 43) Craig, *op. cit.*, p. 13.
- 44) 中原道子「歴史的背景」, 綾部恒雄・石井米雄編, 前掲書, 25ページ。
- 45) 可見弘明「民族と言語」, 77ページ。
- 46) Craig, *op. cit.*, p. 13.
- 47) 48) 可見, 綾部恒雄・石井米雄編, 前掲書, 100ページ。
- 49) 黄彬華・呉俊剛編, 田中恭子訳『シンガールの政治哲学 (下) —— リー・クアンユー首相演説集 ——』井村文化事業社発行, 東南アジアブックス, 1988年, 117ページ。
- 50) 同上書, 118ページ。
- 51) 同上書, 120ページ。

- 52) 同上書, 117ページ。
- 53) ~54) 同上書, 120ページ。
- 55) 同上書, 121ページ。
- 56) ~58) 同上書, 120ページ。
- 59) 同上書, 127ページ。訳注による。
- 60) ~62) 可見, 綾部恒雄・石井米雄編, 前掲書, 100ページ。可見によれば, 「強引」な言語政策の推進は, 1971年5月に英語教育の隆盛に反発して起きた「南洋商報事件」を契機としているという。政府は, 有力華字紙『南洋商報』の英語教育推進反対報道に対して, 同紙の幹部を逮捕する。この事件を境に, 政府は, 英語と母語の二言語政策を強引に推進する。学校では, 英語を用いない児童や生徒にまで「罰金」が課せられたといわれる。
- 63) 64) 山下晴海, 前掲書, 59ページ。三大方言集団とは, 福建・潮州・広東の方言集団である。
- 65) シンガポール経済開発庁『ネクスト・ラップ——2000年のシンガポール——』日本語版, シンガポール政府, 1991年, 77ページ。
- 66) The Institute of Policy Studies, *Singapore: The Year in Review 1995*, Edited by Yeo Lay Hwee, Times Academic Press, 1996, pp. 29-30.
- 67) Craig, *op.cit.*, p. 22. 普通車一台を所有するのに, 約300万必要であると聞いた。低料金のMRTによって, 都心から郊外に移動すると, 乗降駅に隣接して, 大規模な高層住宅が広がっている。ターミナルからは, バス路線が四方八方へ伸びている。タクシー料金も非常に低廉である。日本円で2,000円も用意すると島の東端から西端まで乗車できる。
- 68), 69) *Ibid.*, p. 17.
- 70) シンガポール経済開発庁, 前掲書, 80ページ。公団住宅に入居できるのは, シンガポール人のみであり, 海外からの駐在員は, 高価な賃貸料を支払って, 住宅を確保しなければならない。
- 71), 72) 同上書, 84ページ。
- 73) 可見弘明, 『シンガポール海峡都市の風景』, 岩波書店, 1985年。
- 74), 75) 同上書, 54ページ。
- 76) 同上書, 57ページ。
- 77) 同上書, 58ページ。それは, ヨーロッパ系の人々の居住地, ムスリムの居住区, アラビア人居住区, マレー系の人々の居住区, 華人社会では, 福建人, 広東人, 潮州人, 海南人, 客家の居住区というように, 住み分け政策が行われた。そのなごりは, 今日のシンガポール社会にもみられる。
- 78) 同上書, 70ページ。
- 79) 同上書, 73ページ。シンガポール駐在の共同通信中村就一記者は, シンガポールの「もろさ」について, 次の様に述べている。「一人当たり国内総生産が旧宗主国の英国を上回るようになり, 『多民族国家のもろさ』への意識は希薄化しているが, リー・クアンユー上級相は『経済がおかしくなれば, たちまち民族間の不和が表面化する』と警告する」(「アジア交差点」『神戸新聞』1996年12月9日, 夕刊)と。
- 80) 同上書, 74ページ。
- 81) Richard D. Alba, *op. cit.*, p. 578.
- 82) *Ibid.*, p. 579.
- 83) Jeffrey G. Reitz, *The Survival of Ethnic Groups*, McGraw-Hill Ryerson Limited, 1980, 倉田和四生・山本剛郎訳編『カナダ多民族社会の構造』晃洋書房, 1994年。
- 84) *Ibid.*, p. 150ff. 同上書, 228ページ以下。
- 85) Richard D. Alba, *op. cit.*, p. 580.
- 86) 佐々木宏幹「宗教と世界観」, 綾部恒雄・石井米雄編, 前掲書, 104-132ページ。
- 87) 同上書, 106ページ。
- 88) 同上書, 107ページ。
- 89) 同上書, 109ページ。
- 90) 同上書, 108ページ。
- 91) 同上書, 119ページ。
- 92) Julia Ching, *Chinese Religions*, The Macmillan Press LTD, 1993, pp. 205-220.
- 93) *Ibid.*, p. 207.
- 94) *Ibid.*, p. 208.
- 95) ~101) Craig, *op.cit.*, p. 132.
- 102) ~105) 加地信行『儒教とは何か』中公新書, 1990年, 174ページ。
- 106) Charles H. Mindel & Robert W. Habenstein(ed), *Families in America: Patterns and Variations, Second Edition*, Elsevier, 1981, p. 8.
- 107) *Ibid.*, pp. 8ff.
- 108) Eddie C. Y. Kuo & Aline K. Wong(ed), *The Contemporary Family in Singapore: Structure and Change*, Singapore University Press, 1979. 本書は, 筆者が, シンガポール大学に, 一人の著者でもあるインド人の社会学者A. マニ教授を訪ねたときに, マニ先生から頂戴したもので, シンガポール社会の家族の変動について知るには, 非常に参考になる。シンガポールにおいて, 親族の絆の強さが維持されなかったという見解は, 編者たちが, モーリス・フリードマンの説を引用したものである。*Ibid.*, p. 7. Murice Freedman, *Lineage Organization in Southeastern China*, London School of Economics Monographs on Social Anthropology, no. 18, London: Athlone Press, 1958.
- 109) 佐々木宏幹, 綾部恒雄・石井米雄編, 前掲書, 115ページ。
- 110) 渡邊欣雄『漢民族の宗教——社会人類学的研

究 ―』第一書房, 1991年, 273ページ。

111) Craig, *op. cit.*, p. 147.

112), 113) *Ibid.*, p. 193.

114), 115) *Ibid.*, p. 194.

116) 大津留厚『ハプスブルクの実験 ― 多文化共存 ―』中公新書, 1995年, 58ページ。この様な多

様性にもかかわらず, 非常に良好な治安が確保されている。エスニック・グループの間においては, 表面的には葛藤はみられない。市街地の路上で, 宝くじがガードマンの立ち会いもなしに売られていることを一つ想起すれば, 治安の良さは明らかである。

(1996年12月12日受理)